

高齢者との交流経験が高齢者イメージに与える影響についての検討

土谷 曜子

少子高齢化により、高齢者人口が増加している。医療技術の進歩などにより、介護を受けたり寝たきりになったりせず日常生活を送れる期間を示す「健康寿命」が、2016年において男性72.14歳、女性74.79歳となっている。65歳以上の高齢期においても10年間ほどは高齢者であっても健康に自立して生活できるが、高齢者イメージが否定的であるとする先行研究が多くある。現実と人々の持つ高齢者イメージにはギャップが存在する可能性がある。

そこで本研究では、40～60代の人々を対象に、高齢者との交流頻度や交流の質が高齢者イメージにどのように影響するかを検討することを目的とした。そのため、40～60代の中高年の10名を対象に半構造化面接を行った。

分析の結果、「見た目」「身体機能」「認知機能」「心」「行動」「交流」「認知症」という7つのカテゴリーが抽出された。また、高齢者との交流場所として、家族、地域、職場、地域活動、その他(メディア)が挙げられた。高齢者との交流別に発言を分類した結果、交流の場所や交流の内容・質により、異なる高齢者イメージがみられた。

この結果から、高齢者との交流が少ない、もしくは同じタイプの高齢者層とのみ交流していると、高齢者イメージが肯定的もしくは否定的に偏ると考えられる。様々な高齢者と接する機会がある地域や職場では、肯定的なイメージと否定的なイメージがともに存在し、高齢者イメージが多様になると考えられる。先行研究において人々が持つ高齢者イメージは将来老年期に自己観になる傾向があると示されており、偏った高齢者イメージは老年期の適応に悪い影響を及ぼす可能性がある。高齢者も他の世代と同様に様々な人が存在する。現実には正しい高齢者イメージを形成するためには、限られた高齢者との交流のみでなく、さまざまな高齢者と交流することが重要であることが示唆された。

本研究は調査期間が短かったことから、調査対象者が非常に少なく、集計するには数が不足している。今後はより長い調査期間を設定し、さらに調査対象者を増やすことによって、より多様な意見を収集していく必要がある。家族において親の自立度や手助けの度合い、高齢者の男女差による高齢者イメージの違いなどに注目して調査することが望まれる。さらに、本研究は高齢期をひかえ、親が高齢者世代だと考えられる40～60代の人々を対象としたが、本研究で得られた高齢者イメージが中高年特有のものであるのか、他の世代との違いがあるのかどうかについて、他の世代の高齢者との交流による高齢者イメージの影響について検討し、比較することが望ましい。(臨床死生学・老年行動学)